

讀史餘論考

宮崎道生

目次

- 一、讀史餘論の成立と構成
- 二、讀史餘論の主張と史觀
- 三、讀史餘論批判

新井白石の著書中、從來最も広くよまれたものと云へば、先づ讀史餘論に指が屈せられるであらう。それは主として本書が通史としての形態をもつことと共に、公武の政治の継起交代について大胆卒直なる論評を加へて居ること——史論風の歴史として空前のものであることによるものと思はれる。従つて、本書についての論考論評は、管見の及ぶところだけでも可成り多数存在するのであつて、殆んど論じ尽されたと云つてもよい程である。然るに、それら先学の諸論考を読んで再び讀史餘論にかへり、白石の主張に耳傾ける時には、必ずしも納得出来ない所があり、また從來の批判にはなほ洩れ遺つた点があるやうにも考へられるので、敢へて先学の高論に蛇足を加へることとした。

一、讀史餘論の成立と構成

本書の成立事情は、周知の通り左の跋文・識語及び書翰の文等によつて比較的明瞭に窺ひ知ることが出来る。

(イ) 右三冊ハ正徳二年春夏之間、坐ヲ賜テ古今ヲ論ジ曰セシ時ノ講章ノ草本也。(全集第三 五八三頁)

(ロ) 此本書ハ懷ニセシモノナル故ニ、字細カニシテ見ヘ分チガタカリシヲ、新川平元成、ヤヤ字大クミルニ便アルヤウニ写セルヲ、亡息宜卿ソレニヨリテウツセシ程ニ、功終ラズシテ身終リヌ。ヨリテ家僅シテ補写セシメ、是歳享保八年十一月十一日ニ写シ終リヌ。(同上)

(ハ) 文廟篤恭仁厚、雅_ニ尙儒術。初自_ニ潛邸、日命_ニ文士_ニ分_ニ講經史、祁寒大暑未_ニ嘗有_ニ廢。二十余年之間、事如_ニ出_ニ乎_ニ一日。及_ニ嗣_ニ位、春秋已高、深知_ニ時政得失民心向背。若_ニ臣美_ニ、空疏叨辱_ニ廷對。至于治乱安危之要、周悉討論、繼_ニ燭見_ニ跋、語猶未_ニ盡。臣竊懼_ニ庸淺寡聞未_ニ習_ニ國体、進對之間言乖_ニ典籍、辭理失_ニ所、不_ニ副_ニ好問之盛意、無_ニ裨_ニ風化之萬一。每_ニ暇日、旋_ニ閱經史、開_ニ列古義、仍參_ニ下_ニ之時事及近代。本朝典故可_ニ資_ニ論思_ニ者。雖_ニ稗官小史、皆即疏記積、累日久遂成_ニ三小冊。新川平元成、前世侍講也。壬寅之春、共談_ニ一時盛事、偶及_ニ是書。書原係_ニ國語、字勢極細若_ニ不_ニ可_ニ讀。元成因請_ニ繕写。書字稍大便_ニ于省覽。季子宜卿亦欲_ニ写_ニ一本_ニ以為_ニ中_ニ之副。及_ニ其功半、忽遭_ニ寒疾、委篤綿綿、癸卯夏五月不_ニ起死。宜卿之舅朝景衡氏、愍_ニ其志不_ニ就、乃使_ニ門生統_ニ成全書。嗟我今年近_ニ七十、亦既老矣。豈圖徒感_ニ先主之奇遇、更傷_ニ亡子之蚤逝。百憂所集、或_ニ此_ニ一書。人生處_ニ世卒到_ニ于此。亦何忍_ニ言。享保甲辰春二月壬申跋。(全集第三 五八四頁)

(ニ) 正徳壬辰年春夏の間、進講畢て後、別に座を賜はりて、本朝代々の沿革、古今の治乱を論じ申せしに、深く御旨に愜ひしが、事長くしては、事歴混雜し、御覽に堪させ給ふまじければ、其大略を記し奉るべしと仰下されしに依而、此小冊子を奉りぬ、猶讀史餘論あり、就て見るべし。

(ハ) 本朝の総論あのごとくなるもの(註―栗山潜鋒著保建大記の論)にてはなく候。前代に日毎に御講究の事にて、老

朽覺書し候て懷中し候ものを土肥並に亡息などうつしたて候もの三卷にて、紙數三四百葉のもの有之候を御目にかけたき事と存候事に候。(佐久間洞巖宛手簡 全集第五、五二八頁)

以上の中、(一)は全集本第三卷の例言の指摘する通り、本朝古今沿革餘論と題するものの奥書に見えるところであるが——これと同一内容で讀史論略と題するものが現存する、それには序に(一)と同一の文が収められ、(二)とほぼ同じ文章が奥書として添へられてある(一)——、これが最もよく成立の出発点を示してゐるものと認められる。即ち本書は先づ歴史進講の副産物——これを具体的に云へば通鑑綱目進講(二)の副産物であるといふことが知られる。従つて讀史の史は、本朝の歴史ではなくしてシナの歴史であり、通鑑綱目を指してゐると解すべきであらう。「別に座を賜はりて」とあるから、正式の進講でないことは明瞭で、これはランケのマキシミアンに対する進講於いて、講義の合間々々に質疑応答を行つたのと似るものである。但し、此の場合は家宣の質問に基いて白石が答へたといふのではなく、シナの事蹟の理解に資し、彼国の史実に鑑みて我國の歴史をも認識せしめんが為に、我國古今の沿革を白石が一方的に説明したといふ点に彼れとの相違がある(或は家宣の方で質問するところがあつたかも知れないが、その事は右の文面に關する限り知るよしもない)。この本朝沿革餘論及び讀史論略を見ると、それは本書最初の総論(本朝天下ノ大勢九變シテ武家ノ代トナリ、武家ノ代マタ五變シテ、当代ニ及ブ総論ノ事)と、終りの部分「信長治世之事」「秀吉天下之事」の二条とから成つてゐる。これは一応單獨の著作と認め得ると共に、白石の構想が要約されて居る点でも注意せられるものである。此の進呈本は一先づ完結されたものとして存在することになつたが、讀史餘論の方は正徳二年には未だ「草本」であつたに過ぎず、懷中用につくられてゐた關係上小型のものであつた上に、細字での書込が行はれて讀解に困難を感ずるものであつたことが、右の諸条によつて知られる。而してそれが定稿となるのは、(一)の示す通り(「百憂所集成ニ此一書」) 最晩年の享保九年の事に屬する。従つて、その間に約十年の時間が

介在することになるが、ここで検討を要するのは、その間に於いて増補もしくは訂正が行はれたか否かといふことである。それを考へしめるのは、(イ)の中の言葉「累積日久。遂成『三小冊』。」である。此の言葉によれば、草本が完稿となるまでには相当の日子を必要としたことが察せられるので、(例)に「前代に日夜に御講究の事にて」と併せ考へる時、正徳二年の秋を基準として、時間の幅を前か後か、いづれをとるかが問題となつて来る。

一般的に云つて、白石が旧稿に手入れを行つたのは、正徳六(享保元)年致仕以後のことに属すると見ることが出来る。その代表としてよく知られてゐるのは采覧異言であらう(3)。致仕以後の白石の著作に於いて年代のはつきりしてゐるものは(定稿といふことになると時点の動くものが出て来る)可成り多く、而もその著述もしくは補訂については、幸ひ幾つかの手簡中で報じたものがあるので、白石自身の序、跋の日付と併せ見て著作年代を把握するに困難を感じない。そこで本書について白石自身が語つた言葉を、現在全集に収められてゐる手簡中に求めると、さきに掲げた(例)が発見されるのみである。他書の場合は、著作の計画が予告されたり、同一書が一再ならず語られてゐることや二人の人物に語られてゐることがあり、また書物を貸したこと、それが謄写されたことなどの知られる手簡があるにも拘らず(4)、本書についてはただ僅かに潜鋒の保建大記の引合に出されてゐるに過ぎないのである。(イ)の記述、享保七年土肥元成と亡き將軍家宣の事を談じ合つた際、草本をとり出して元成に示したといふ語によつても家宣亡き後に於いては白石は本書に比較的關係を拂はなかつたと考へても差支へないやうに思ふ。勿論関心がなかつたといふのではないが、本書は白石が長年の通鑑綱目進講の際に併せ考へ來つたことの記述であつて、特に新たな研究の続行による改訂——例へば采覧異言や西洋紀聞等の場合の如き——を必要としなかつたことや、また他書の述作に主として関心が向けられ、且つ精力を傾述してゐた為に、本書については特に補訂を行はうとする強い意欲も起らず事実その暇もなかつたのではないかと思ふのである。(他書の述作と云へば、右に挙げた世界地理関係のものを始

めとして多数あるが、就中経邦典例の述作を重く考へる必要があらう。何となれば、讀史餘論中で家宣に要望した大綱を具體的に考究したものが、経邦典例であるからである。更に云へば既述の通り、本書は通鑑綱目進講の副産物と見るべきものであるから、例へば古史通や采覽異言等の如く將軍に進呈する為のものとは異つて——その一部はすでに進呈本となつたのであるが——比較的軽く取扱はれたものと考へられ、白石のやり方として進講中は全力を挙げて諸書の涉獵につとめ、講義の完璧を期して講案への書入れも精細を極めたことであらうが、一応用が済んだ後は、右述べた如く他著撰述の事もあつて、殆んど手を入れることなしに放置せられたと考へることが出来るのではあるまいか。放置といふのは或は言葉が過ぎるかも知れないが、正徳二年夏には書入れのことが大体終り、三冊本の形態をとつたと見てよいと思ふのである。因みに(二)に「猶讀史餘論あり、就て見るべし」といふ一句があるが、この識語は何時のものであらうか。その口吻から察するに、自らの子孫にむかつて發せられたもののやうであり、例へば、折たく柴の記や西洋紀聞、本朝軍器考などと同様、晩年に至つて自己の學問的業績を回顧し、その保存や整理について考慮をはらふに至つた時期の發言と考へられる。もし右の語が清書された三冊本をさすものとすれば、この識語は享保八年か九年頃のものとなるわけであるが、如何であらうか。

要するに、讀史餘論が形態を整へたのは正徳二年の夏秋の頃であり、定稿となつたのは享保九年春二月の事であつたといふことになり、今日我々の手にする本書の原本は

白石の完稿——土肥元成の繕写本(享保七年)——新井宜卿及び門生某による元成繕写本の謄写本(同八年)——白石の定稿本(同九年)

といふ過程をふんだものであることが知られる(5)。

次に本書の構成であるが、これについては從來精細に論じられて居つて、もはや間然するところ無いやうに見え

る。殊に九変觀と五変觀との關係については、鮮かな解明が行はれて来て居るのであるが、私にはそれが餘りにも鮮かすぎてやや白石その人の意向をまげた所があるのではないかと思はれるのである。今論述の都合上、九変觀、と五変觀の兩者を上下二段に排列併記して見ると、

一変―本朝幼主並撰政始事 (附は省略)

二変―関白並廢主始事

三変―宇多醍醐村上三代撰関ヲ置カレザル事 (附は省略)

四変―後三条院撰家ノ權ヲ抑ヘ給ヒシ事

五変―上皇御政務ノ事

△六変―鎌倉殿分掌天下之權事

△七変―北条九代陪臣ニテ国命ヲ執シ事 (附は省略)

△八変―後醍醐復位ノ事

△九変―南北分立ノ事

上古征伐自天子出事

中世以来将帥ノ任世官世族トナリシ事

一変―源賴朝父子三代ノ事

二変―北条代々天下ノ權ヲ司ル事

後醍醐帝中興御政務ノ事

三変―足利殿北朝ノ主ヲ建ラシ事

並室町家代々將軍ノ事

四変―信長治世ノ事

秀吉天下ノ事

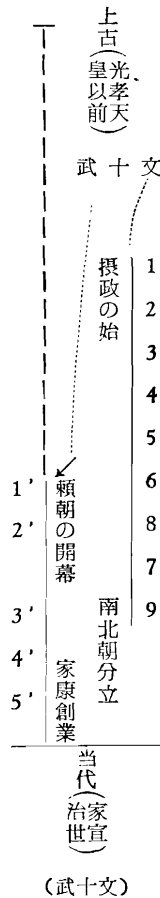
五変―(註、徳川の制覇)

となり、右の中△印を附した部分が兩変に於いて重複するものと判定されて、その意味が考察されて来た。即ち、この九変觀と五変觀とを綜合して考察すれば、それは三段に撰する事が出来るので、第一段は公家一元觀であり、その第二段は公武二元觀であり、第三段は武家一元觀であるといふのである(6)。問題となる重複せる部分―鎌倉建武中興・吉野室町の時代は、公武二元觀がとられてゐるといふことになる。

卷の構成を見ると、上段の九変觀が卷一に、下段の中「後醍醐帝中興御政務ノ事」までが卷二に、武家三変以後が

卷三に収められて居る。この構成について三卷を二つに分け、卷一を序論と見、卷二及び卷三を併せてこれを本論と見る観方がある（？）。かかる観方をも含めて従来一般的に、白石は武家制覇の現実に立脚して、將軍家宣に徳川政権出現の歴史的必然性を理解せしめようとの意図の下に、歴史を廻行的に考察し政治史的観点から因果關係を追究したといふ解釋が下されてゐる。實際、卷一から卷三までを通観する時、卷二の存在は一考を促すものがある。もし此の際、普通のやり方を以て歴史を一元的下降的に觀察したとするならば、卷二の存在は確かに不自然さを感じしめるもので、卷一から直ちに卷三につづけるのが順当であるやうに思はれる。従つて、卷二の存在意義を肯定するとなれば、勿論本書に於いては九変五変の二元観が大前提としてあるのであるが、それと共にこれが右述べた如き意図の下に廻行的方法を以てせられた結果であることを承認せざるを得ないわけである。二元観と云へば、それは各項目の標記の仕方にすでに現はれて居る。九変と五変とでは夫々主体性を異にすることは、重複を示す公家の六↓九変と武家の一↓三変とを比較して見れば明白である。「分掌天下之權」トカ「陪臣ニテ国命ヲ執ル」といふ云ひ方は、武家を主体にしたものでないこと云ふまでもなからう。反対に、「天下ノ權ヲ司ル」とか「北朝ノ主ヲ建ラル」とかと云ふ云ひ方は、公家の側に立つては云へるものではない。この点については今詳述を避けるが少しく内容に立入つて見ても、例へば頼朝論の如き、卷一の方では行家、義経の追討にふれて朝廷に二心ありと非難しながら、卷二に於いては守護地頭の設置を以て、王威を弱め自らの權を専らにしようとしたものではないと弁護する口吻を示してゐて、両者がその観点を異にすることは疑ひない所であるが、然しながら必ずしも二元観がすつきりした形で現はれてゐるわけでもない。それはさて置き、卷一を以て序論と見、卷二卷三を以て本論と見なす見解から取上げると、これを二元観に移して見る時には果して武家中心観が主であつて公家中心観は従たるに過ぎないのか、更につきつめれば公家中心観は結局は武家中心観に撰せらるべきものなのか、といふ課題に置きかへられることにもならう。結論から云へば

卷一と卷二卷三（併せたもの）とは同じ比重をもち、公家中心観と武家中心観とも、亦同様の関係にある、と私は考へる。（この公家といふ用語は二様に用ひられ、皇家を含むものと撰閥家を中心とする公卿勢力のみをさす場合とがあるが、ここでは、先学の使用例に従つて一応前者の意味で用ひ、次節に於いては白石の使用法に即して後者をとり、前者をいはいはゆると冠して使用することとする。）かりにこれを図示すると、



（註） 1↓9は公家九変観を、1↓5は武家五変観を表はし、兩者とも時間の長さは一応無視して同間隔を以て表示した。となる。

即ち、白石の胸中の構想を推しはかると、公家と武家とは元来一体であるが、中古以後は二つに分れて平行線を描いて居る如くである。平行線を描くと云つても兩者の關係は不可分のものであるが、一応歴史的発展の迹に徴して——兩者の間に対立抗争の行はれた時期があるのであるから——さう考へることは決して無理ではない。（兩者の關係については後述）而してその平行線は、將軍並びに白石個人の利害からすれば、当然武家側の發展線の方に重みがある訳であるが、此の場合には必ずしもさうではなく、私には等價的に取扱はれてゐるやうに思はれる。それは白石のスケールの用ひ方にもよく現はれてゐるところであるが、それよりも更に重大なことは、中古以後に於いては公家は文をになひ、武家は武になつていづれも偏跛に陥つてゐるといふ判断が白石にある事である。此の點の証明は

後に譲るとして、白石の理想は文、武、兼、備、にあるので、それが上古には認められたが、中古以来文武夫々わかれて世官世職となつたことが不幸のもとであるとするのである。卷二に於いて、頼朝の開幕よりかはるかに遡つて「上古征伐自天子出」をかかげ、ついで「中世以来将帥ノ任、世官世族トナリシ事」を挙げたのは、さういふ考へ方を示すものである。然らば、卷二に於ける「源頼朝父子三代ノ事」以下三条の配置はどう解せらるべきであらうか。既に述べた通り、この三条はむしろ卷三と一括して編成する方が適切であるやうに思はれるのであるが、さうなつてゐないのは、書物の分量上からの処置、單なる便宜上の取扱ひによるものであらうか。卒然として本書にむかふ時には然う考へらるれし、さう考へても差支へない様にも思はれる。此の點は卷一から卷二へ移る場合とは、大いに異つてゐると明らかである。然しながら、考へ様によつては足利尊氏の北朝擁立から第三卷をはじめたことには、一つの意味が見出されないでもない（後述）。ともかく此の三条が卷二に収められ、再度論ぜられてゐることは、既述の如き白石の構想に基くことではあるけれども、もと／＼さういふ構想を抱かざるを得なかつた歴史的現実がそこにあるからの事であらう。即ち、短時日にとどまつたとは云へ、建武中興が出現したことがそれである。もし朝廷の政權回復運動が効を奏せず、承久の変に於ける鎌倉の勝利がそのままに續いてゐたとすれば問題はなかつたであらうが、承久復古の計畫を繼承して建武中興が成功を見た以上、公家側の發展線は南北分立まで辿らざるを得なかつたわけであり、又武家の發展線を遡及する場合にも、政權獲得の出発點を源頼朝の開幕に求めるとして、そこではつきりと天下の權をとるとは云ひ切れず、天下の權を分掌すといふ語を用ひたのも、建武中興によつて一度は幕府政治が切斷された事実によるものである（白石が北朝を恰も偽、主の如くいひ、いはゆる南朝正統の立場をとつてゐることは、読者の注意をひくところである）。要するに、この三条で取扱つたところは公家と武家との対立抗争の時期に当り、眞の決着を見なかつたところから、卷三に組入れてすつきりとした形とする事が出来ず、前二条と組合せて卷二に収めることと

し、足利政權の出現以後を卷三に収めたと考へてよいであらう。而してまた、さきにふれた様にこの卷三の構成に一つの意味が見出されるといふのは、足利政權が弱体ながらも政治上武家一元の体制をつくつた點で、徳川幕府がよつて以て規式とするに足ると判断されたことによる、と認めることも出来るであらう。それは室町家代々將軍についての論述が、従来の將軍や執權の場合と異つて、徳川家の始祖家康の諸政策との對比に於いて行はれて居る所にかがはれることであり、すでにしばしば指摘されてゐる通り、義満論の箇所などは室町幕府を以て徳川の先蹤として考へてゐたことを示すものである。

ここで再び本朝古今沿革餘論の構成を想起すると、これは最初の九變觀五變觀の總論と武家の第四變（織豊政權）とから成つてゐるわけであるが、この構成は或る意味では白石の構想が煎じつめられた形で現はれたものと認められなくもないので、古今沿革といふ標題とも併せ考へて、讀史余論の場合にも過度にその政治性を強調し、歴史を借りて自己の抱懷する政見を吐露したものやうに判定するのは、行過ぎではないかと思ふ。前掲の跋文の「至治乱安危之要」、周悉討論」云々と見えるやうに、問題の所在の探究や問題點の把握は、廻行的方法に従ひ現代的關心及び意識の下に行はれたとしても、因果連関の關係の追究に當つては、他方下降的方法をとらなくては済まないから、治乱安危の要をとらへんがために、多くの史料に拠りつつ、學問的態度を以て歴史の現實を時間の経過のままに觀察したと考へるのが穩当ではなからうか。而も聴講者としての將軍家宣は、年すでに五十を越えて人間として深い經驗を積み、政治的識見も十分に備つてゐたことであるから（「春秋己高、深知時政得失民心向背」）、白石としても武家の立場に於いて我田引水的な説を立てることは出来なかつた筈で、何にいふ如く自己の立論が果して妥当であるか否かにつき深刻なる反省をつづけてゐた訳である。そこには白石の學的良心が、つねに鋭く働きつづけてゐたと見なくてはならないであらう。従つて、本書の構成は、科學的態度と時務的關心との二者によつて決定せられたもの

と、私は思ふのである。

二、讀史餘論の主張と史観

本書の主張が那邊にあり、またそこに現はれた史観が如何なる性質と傾向とをもつかについては、従来多くの論説がなされて来たが、本書が徳川將軍への進講録であることの指摘から出發して、これは武家政治の必然性、徳川政權の存在理由を説明せんとするものであり、従つて現状維持論であり、保守主義的である、更に云へば封建史学の完成者としての主張がある、又ははば公家衰亡史Ⅱ武家勃興發展史と称することも出来るし、そこにはいはゆる公家・武家の二元觀が現はれてゐるから後の尊皇論にも佐幕論にもつながりうるものである、さういふ公武關係に対する觀方は當時に於ける朝廷と幕府との親近關係の反映である、或はまた本書は單なる政治史に過ぎず、而も治者中心の觀點に立つて居るため社会の動きを眞に動的發展的に把握しえてゐない、等々がそれらの諸見解の要點と見なし得やう(8)。而して前節すでに述べた通り、いはゆる公武二元觀に於いていづれの比重が重いかと云へば武家の方にあるとする論が多い様に思はれるが、これに対して私は殊更に異を立てようとするものではないけれども、さう決めてしまふことに疑問を抱くものである。さきに示した通り、公武二本の發展線は同じ比重をもつものと考へる方が妥当であると思ふのであるが、その証明の前に従來の論の擲り所について少しく再吟味を試みて見よう。(紙幅の都合上原文の引用を省く)

本書を通読する時誰しも気付く點の第一は、徳川家康に関する限り讚美こそあれ、批判の言辞を殆んど見出せないといふ點であらう。次にもはや公家政權の時代は永久に去つて、武家の天下になつたのだといふ論調が貫いてゐる點があると思ふ。この二點が存する限り、本書の主張は武家政治の必然性と徳川政權の存在理由とを証明するにあつ

た、といふ判決は動かせないやうに見えるのであるが、少くとも後者の判決の拠り所となつてゐる、本書中の家康の事業の完全性を述べた點については、従来とは別の解釋が出来ると思ふのであり、また前者の判定についても、公家の用語を白石その人の定義する所に従つて所論を見る時には、いはゆる公武關係について従来論とはおのづから異つた解釋が生れて来る筈のものである。先づ家康論の方から検討を加へると、賴朝をはじめとして武家の棟梁といふべき人物のいづれと比較しても家康は優つてゐるので、伯者と王者といふ分け方を用ひるならば、賴朝・尊氏・信長・秀吉等は伯者の部類に入る人物であるのに対し、家康は王者——はつきり云はず暗示的にいふ——といふべき存在であることを述べた他、室町將軍との比較に於いては、政策の具体的な面に於いて家康の深謀遠慮を挙げてゐるのがそれである。これらを見れば、家康は間然するところなき理想的人物の如き印象を与へるのであるが、詳しく見れば婉曲な云ひ方を以て家康の事業の内、補強と修正とを必要とする部分を指摘して居ることが知られる。即ちそれは宗教政策の方面であるが、一向宗とキリシタンとの抑制策に不備と誤謬があることを挙げて、家宣の考慮を要請してゐるのである。それにしても、やはり家康に対しては賞めすぎの感があり、それ以前の將軍や覇者をはかつた尺度（倫理道德）をそのまま家康にはむけないといふ偏蔽があることは免れないところであるが、本書が家宣への進講録であることを思ふ時、讚美が批判に代つてゐることは十分に意味があるものと考へられる。何となれば白石の胸中には家宣をして堯舜の君たらしめようとの意慾があり、家宣をして自己の抱懷する經綸を實行させようとの大望がひそんでゐるのであるから、そのためには家宣を奮發させる必要があり、奮發させるのには始祖家康のすぐれたる事業を讚美し、憧憬を以てそれを回想させることは、自然で而も最も効果のある方法であるからである。本書に限らず、家康讚美は白石の諸著——諸建議にあらはれてゐるところで、例へば著名な改貨（金銀復古）の如き、家康時代の制にかへることが此の政策の基調をなしてゐること云ふまでもない。私は白石の家康讚美には家宣激励といふ下心があるもの

と判断する。而してこれは家康の事業に於ける弱點及び二代以後の變化に於いて是正すべき點（後述）を隨所に挙げ、家宣の裁斷実行を要望した態度と併せ考ふべきものであらう。

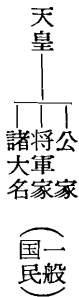
次に公武關係について、白石がいはいゆる公武の政治上に於ける交代を必然的と見なした點であるが、それは勿論動かない所であるが、その場合の公家とは皇家（白石のいはゆる王家、或は朝家）を含めたものではないので、公卿勢力即ち藤原氏の摂関家に代表される文臣貴族層をさして云つて居ることに注意する必要がある。本書中よく知られた一條、

「賴朝ツヒニ天下ノ權ヲワカタレシ事、皆是累代ノ餘烈ニヨリテ也。ソノ事ノ由ヲ考ルニヒトツニ、天慶ノミダレニヨレリ。此乱ノヨリテ來レル所ハ、執柄ノ人々朝家ノ權ヲ奪テ皇威日々ニウスク、是ニ加フルニ武備モ又ユルミシガ故也。」（全集第三、四六九—四七〇頁）

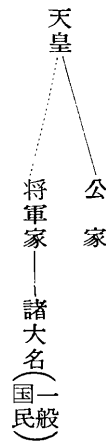
これまた有名な一條

「中世ヨリ此方、喪乱ノ際、節々段々義ヲ思ヒ力ヲ竭シ死ヲ致スハ、タゞ武人ノミナリ。世スコシモ穩ニナリヌレバ、尊位高祿ニ居テ武人ヲバ奴僕雜人ノ如クニ思ヒナシ世ミダレシ時ニハ捧首鼠竄シテ一人モ身ヲ挺テ忠ヲ致ス者ナキハ公家ト僧徒ノミ也。誠ニ国ノ蠹害トハ此輩ヲゾ云ベキ。」（全集第三、五四—五五頁）

等を見てもそれは明らかである。そも、本書が皇威の盛んな時代を省いて、その衰へはじめた時期から筆をおこしたのは、皇家よりも執柄の家——摂関家に責任ありとなし、その責任を追究する意図をもつものである點を看過すべきではなからう。かかる公家の用語から白石の觀念形態を推量すると、白石のいはゆる国体は、名分上は



といふ形を考へてゐたのであり、本書及び武家官位装束考・折たく柴の記等を併せ考へる時には、政治上の理想型として



(註) 点線は支配関係のないことを示す。一般國民は當時の用語に従へば、四民であるが、今は前者の称を用ひた。

といふ構想を抱いてゐたものの様である(10)。即ち、公家と武家とは対等の立場にあるが、両者の上に、公家がそれとは外戚關係にあり、武家がその血筋をひく(皇胤——全集第三、四、六九頁参照) ところの皇家(朝家)が位するので、かかる

前提の下に白石は、公家・武家(徳川以前)の両者に対して名分上から忌憚なき批判を加へたわけである。いふまでもなく、讀史餘論に於いて用ひられた批判の基準尺度は、一つは君臣の大義であり、他は有徳善政であつた。従つて、先学が武家一元觀の適用を指摘せられた第三段階の室町將軍以後の時期、卷三に於いても前者の尺度が用ひられて、痛烈な非難——義満・義持・義教を以て南朝を偽瞞した穿窬の盜とする如き——がむけられてゐるので、武家一元觀として了ふことには無理があるやうに思はれるのである。もし皇家を含めたいはゆる公家を武家と対等のものと見たのであるならば、公家が徳を失ひ民心がはなれさつた後の時代、少くとも頼朝の開幕以後に於いては、武家の批判は後者の尺度——有徳善政だけを以てすれば事足りる筈であるにも拘らず、同時に前者の尺度が用ひられてゐることは不可解とする他はないであらう。更に云へば、本書の主張せんとする武家政治出現の正当性の論拠も、極めて弱いものとならざるを得ないではないか。

かくして、私が前節に於いていはゆる公家と武家の二本の發展線を描いて、両者が同じ比重をもつと述べたことの

意味が明らかになつたことと思ふ。白石の立脚した現実が真に武家の天下であつたにしても、それは白石の描いてゐた理想像からすれば未だしいものであつたので（後述する通り、家宣に対し多くの改革事項をあげて説明して居ることによつてそれは明かである）、公平に見て武家政治の方がいはゆる公家政治に完全に優越したものであるといふことを、過去の歴史に於いて証明し確信する程の奮勇を、白石が持ち得る筈はないのである。而も公家・武家ともにその政治的權威の支柱を皇家に求めなくてはならないのであるから、政治的現実のみに拠つて武家の發展線の優越を主張する如きは、自から論理の破綻をまねく態度とせざるを得まい。この点を更に明確にする為に、少しく他著に於ける所論を参照すると、白石が朝廷と武家との關係を如何に考へてゐたかを示すものとして、①皇子皇女御出家廢止へいはゆる閑院宮家創立の進言折たく柴の記、②王号論国書復元号紀事、③牙兵の制の批判安積澹泊宛手簡、④敗者に対する同情の論白石手簡等々がある。

①は餘りにも著名であるが、この進言に於いて白石が朝廷と幕府との共榮を説いたことは、白石の根本的態度を示すものとして先づ注意を要しやう。それが徳川家の継続の不順といふ現実に遭遇したことから、その不祥事を絶たうとするのがその目的であつたやうに折たく柴の記には見えるが、それは將軍への建議であつたからのことであるし、必ずしも白石の本心を示したものと云へない。かりに本心であつたにしても、然う考へたことには意義があると云へやう。②の王号論も云ひふるされたところであり、白石に対する評價の岐れるところでもあるが、白石が朝鮮との往復文書に於いて將軍を呼ぶに日本国王の稱を以てすべしとしたのは、何よりも先づ外交儀礼上の必要があつたからであり、国内的に敢て僭称を用ひようとしたものではなかつたこと、国書復元号紀事・殊号事略・折たく柴の記その他著述を見れば明瞭である。白石のいふところでは、かくすることによつて將軍より一段上に位する天皇の尊貴性は一層増すことになり、国威の發揚となる筈のものであつたのである。（「方今翼戴天子、綏靜諸侯、雖下由此假

王^二、以交^上隣國^一、是所^下以張^三我 皇室^二、鎮^上撫方外^一也——(国書復号記事、全集) 第四、七〇二頁)。(3)も有名なものであるから原文をかかせることを差控へるが、安積澹泊が武將養兵の制を以て百世無^レ弊としたのをとらへて、後世議論を免かれな所としたのは、「本朝の皇室の式微し候て、遂に武人の大名となり候は、武家より論じ候はゞ賀し候事にて候共、朝廷より見候にはこれなどの大弊はなき御事に候歟」(全集第五)といふ考から出たものである。これは白石の頭脳の冷靜さによるものであらうが、同時にまた朝廷を幕府の上に置いて考へてゐたからの事でもあらう。白石の頭脳の冷靜なることは、(4)に一層よく現はれてゐる。勝てば官軍といふ諺があるが、白石は我国では勝利者の方が常に是であり、敗残者の側が常に非とされて来たことに疑をむけてゐるので、「本朝の是非は、勝候かたいつもく是にて、負候かたいつもく非になり候様に候歟」、承久の変に於ける朝廷側の態度が正しく伝へられてゐないこと(義時の非をかくす、北條氏を憚つてのこと)を指摘し(全集第五、三四〇頁)、また敗者平家の家風の美をあげて世評の苛酷であることを指摘してゐる態度は(全集第五、四二五頁)、当時としては珍らしい態度と目すべきであらうが、更に吉野方の不幸なる運命に対しても、満腔の同情をそそいでゐることも看過できないところで、それには白石自らが吉野の側に立ち南朝を護持すべく奮闘した新田氏の子孫であつたといふ個人感情も、少からず與つてゐることではあらうが、例へば佐久間洞巖宛の手紙に於いて、「すべて南朝の御事世にしかね候一行にても、其世の人のかくれ候もの残り候文章は、ゆかしく覚候」(全集第五、四五五頁)と云ひ、或は「奥州の官兵やぶれ候時の事に至りて脱闕し候故、いかに落着し候と申す事見へず候事、千古の遺憾に候」云々(全集第五、五六六頁)といふ感想をもらしてゐる如きがあつて、白石が武家の権力者に対して單なる迎合者流でないことを明示してゐる。これは讀史餘論に於いて、足利義教が南北両統迭立の盟約に反して、称光院崩後南朝の寛成親王を推戴することをしなかつた態度を非難したところで、

「サラバ義満・義持ノ盟約モ違ハズ、南朝ノ旧臣ノ憤モ散ジ、且ツハ建武以来八十余年ガ程ニ戦死セシ南朝義士ノ

忠魂冤魂モ慰ツベシ。豈忠厚ノ至ニアラズヤ。其ニ腹アシク南帝ノ統ヲ絶棄參ラセシ事コソ、ウタテケレ。」云々
(全集第三
五三九頁)

と述べたのと相通するものであらう。その他、本書に於いて「普天之下、率土之濱、誰人カ王臣ニ非ズ、イヅチカ王土ニアラザル」と云ひ、自らは著書に於いて「筑後守従五位下源朝臣君美」と署名して常に王臣であることを表明して居る如き（現在位、記、口宣が新井家に大事に襲藏されて居る（11）等々、幕臣白石が朝幕關係を如何に考へたかをよく示してゐる。當時に於いても、後世に於いても、白石の朝廷觀、幕府觀及び朝幕關係觀には多くの誤解が加へられてゐるが、此の点については他に先学のすぐれた弁証があるから（12）、本稿では以上にとどめる事とする。

ここで転じて、讀史餘論にあらはれた史觀の檢討を試みよう。但し、史觀の全貌を見わたすだけの余裕がないから従来保守的であり現狀維持的であると評されて來た点について再檢討を試みたい。それは白石が武家政治出現の必然性をとぎ、徳川幕府の永續性を前提として、所々その強化案を家宣に提出している態度にむけられた批評であるが、確かに白石が武家の封建体制を是認したことも疑ひない所であり、徳川家の存續を眞面目に信じてゐたらしいことも弁護の餘地のない所で、従つてさういふ意味では現狀維持的であると評されてもやむを得まいが、然しながら旧慣旧制を墨守する事勿れ主義とは、全く一線を劃するところがあつた点は見逃すべきではないであらう。従つて白石の考は、純粹な尊皇斥霸論と異なることはもとよりであるが、又同時にこの点が他の佐幕主義とも違つてゐるものと思ふのである。かういふ面を見ても白石の史觀は退嬰的停滯的のそれではなく、前望前進的、また革新的要素をもつてゐたと云へるのである。白石は、ザインの相を忠実に仔細に觀察する態度に於いて歴史家であつたが、同時にゾレンの姿を探究し實現せんとする態度に於いては、理想主義者であり經世家（儒教的）であつたと思ふ。白石はしきりに国体といふ語を使用して居るが、それは現實にあるものではなくて、未だ實現せられざるもの——歴史的現實の中に

潜む日本国のあるべき姿（結局それは幕府的なものであつたにしても）（13）をさして云つたのである。例へば、国体の語が用ひられてゐるのは対朝鮮外交の場合に於いてであるが、自分の企画実行したところが周囲の人々に理解されなかつたことを不満として、「すべて此等の事、国体といふものゝある事をも、武家の旧儀ある事をも、わきまへぬ人々には、共に論ずべからざる所なり」全集第二 九一頁と云つて居る如き、先例旧儀よりも国体の方が優先するものであることを示して居る。それを更に裏書するのは、同じ対鮮問題——王号についての進言中で、「本朝古今の事例を按ずるに、毎事皆々古の例によられしとのみ思はれず、其時に随ひ其事によりて古に未其例あらずといへ共、義をもて起されし新例すくなからず」（朝鮮国信書之式の事全集第四 六七三頁）と云つて居る言葉である。白石があれ程故実に明るく、

また歴史的考察を重んじた人であるにも拘らず、王号復行論に於いて牽強附会や我田引水の説をなしたところのあるのは、思ふにかういふ思惟傾向に基くものであらう。（14）。それ故同じく復古主義とは云つても、白石のそれは吉宗のそれ——諸事權現様の掟通りとして家宣・白石の事業を過半破壊し去つた八代吉宗の復古主義とは、全然範疇を異にするものであることはいふまでもない。かういふ思惟傾向をもつてゐたとすれば、白石の史観を以て保守的現状維持的であつたときめつけてしまふことは、妥当をかくものと云ふべきであらう。

この点を讀史餘論の所説について具体的に見ると、さきに白石が家康の事業に於いてさへ不備あることを指摘したことを述べたが、それをも含めて是正改革さるべきものとして（この中には室町戦国以来の弊風をも含む）、家宣に対し注意を喚起したものは次の通りである（本書の記述にあらはれた順番に従ふ）。

（1）一向宗——其の禍根今に絶えず。

（2）儒士を登用すべきこと。

（3）建寺の弊。

(4) 一代の礼註一武家独自の立場でのものを制すべきこと。

(5) 國用の不足の結果のおそるべきこと。

(6) 風俗の靡奢に陥つて居ること。

(7) 重刑主義の遺存。

(8) 奢靡にして礼節なきこと。

(9) 佛教を以て耶蘇教を抑へる政策の疑はしいこと。

その他、当面の問題として継嗣の重大であることを説き——義政の条に於いて応仁の乱の原因にふれてこのことを説く——婉曲な云ひ方ではあるが、神皇正統記の譜代尊重の論を引いたところで「此論イカガ」と疑惑を示した如きにも、白石の考へ方が現はれて居る。就中注意すべきは、(4)であらうこの足利義満論の一節は、しばしば引用され論議されて来たものであるが、

「世態スデニ変ジヌレバ、其変ニヨリテ一代ノ礼ヲ制スベシ、是即變通ズルノ儀ナルベシ。モシ此人ヲシテ不學無術ナラザラシメバ、此時漢家本朝古今事制ヲ講究シテ其名号ヲタテ、天子ニ下ル事一等ニシテ王朝ノ公卿大夫士ノ外ハ六十餘州ノ人民、悉其臣下タルベキノ制アラバ、今代ニ至ル共、遵用ニ便アルベシ。」全集第三五五六頁

と云つて居るところは、白石が臨機応變の必要を認めると共に、完備した制度組織を樹立せんと考へてゐたことを示すものであらう(15)。(白石のこの主張の、我國の政治上、殊に封建制度史上に於ける意義については、詳密なる論証がすでになされて居る(16)) 此の点は、前述の武家官位装束考の方で具体的に論ぜられてゐるが、その中にも「サラバ当家人オキテ武家ノ旧儀ニヨリテ、万代ノ礼式ヲ議定アルベキハ、マコトニ百年ノ今日ヲ以テ、其期トハ

といふ語が見える。かういふ意図の下に、今は一部分を残して亡はれた大著經邦典例（或は經世典例）が作られたことは、周知のところである。白石は他著に於いても永式とか永制といふやうな言葉を用ひてゐるが、ここに見える「万代ノ礼式」なども同義であるから、かういふ云ひ方を見れば、やがて進歩の停止を招くことになるから前進的ではないことになるではないかといふ反駁がなされやうが、白石は陰陽の消長をとく易の思想の影響を受けて、事物の隆替變化を常に考へてゐた人であり、さういふ将来に於ける變化をも見越して、危氣のない制度を立てて置かうといふのであるから（例へば朝鮮聘使後議などにそれが現はれてゐる）——此の点では白石の考へるところが靜止的イデオロギーに属すると評されても仕方がないかも知れない——、過去と現在とにしか眼をむけない保守主義者とは、やはり區別さるべきであらう。白石の建議建策を見た場合、大本は家康の創業の線にそふべきものといふ態度をとつてゐるが、また普遍的原理（儒教に於ける古法古制古礼を基準とするもの）に則とり——礼文政治と評せられる根本的理由がここにあらう——時代の推移に即応すべきことが述べられてあるので朝鮮使待遇の變更や王号復行・金銀改良・長崎貿易制限等々、いづれを見てもさういふ思考の跡がうかがはれるのである。規範を古に求めるといふ点では保守的であらうが、現實に即応し將來の規式たらしめようといふ点は現實主義的であり、同時に前望的であると云ふことも出来やう。いはゆる稽古照今が白石の史観であると認められるが、白石を以て當時の儒者にあり勝な尙古主義者と見なすことは不当であり、武家封建制の是認者であつたといふ理由の下にのみ、單純に保守的現状維持的であると極めつけてしまふのは如何なものであらうか（ここではその点に論及する餘裕がないが、白石の思考には非封建的要素が種々認められる。學問上、白石が時代に先駆し得たとされるのも、それらの諸要素あるが故であること申すまでもない）。

なほ一つだけ附論しておきたいのは、政治史に偏してゐるといふ批評である。讀史餘論に示した卓見——變、といふ歴史推移の様相のとらへ方も、治者中心の政治史観にすぎないといふ評價が半ば當つてゐることは承認さるべきであらうが、それが白石は社会や經濟の動きを全く無視してゐたといふ意味に於いてのものであるならば、それは正しい評價ではない。先学の指摘された通り、白石は歴史の実相を理解するために、幾多の事象から辯論的に考察する方法をとつたことを看過してはならないであらう(17)。即ち、白石が人心の動向や社会的環境に注意をむけたことは、しばしば時運といふ言葉を使つて居ることや、史料として民衆の卒直なる声である落首の如きを大胆にとり上げたこと(今までの歴史家の試みになつたこと)、具体的事例を挙げれば、例へば足利尊氏の成功を評して「公家ノ政道ノ事ノ外ニ武家ノ世ニ劣レル事ヲ士民能知リヌレバ、……此人朝敵トナラレシ故ニ其名ヲバ惡ムト云ドモ、其ノ実ヲ慕ヘリ」と云つて居ることによつて知られ、また經濟面を重視したことは、義政の政治評の部分に於いて「天下ノ乱ト云フ物ハ、其ヨル所端多シトイヘ共、其根本ハ天下ノ財盡テ民窮リ大名貧シクナレルヨリ事起ルナリ」と云つて居るところを見ても明瞭である。ただ白石は、今日に於ける如きデモクラティクな眼を以つて社会の変動を見たり、或は經濟の發展を法則的に見、經濟面を以て基礎構造的に考へなかつただけの事である。

三 讀史餘論批判

前節述べたやうに、白石の主張や史観については、從來の説を部分的に補訂すべきところのあることが認められるわけであるが、併しながら本書が徳川六代將軍への進講録であるといふ大前提を考慮に入れたとしても、これを學問的立場から観る時にはやはり論理の不通や矛盾撞着のあること、弁護の余地がないのである。これについても既に詳論があるが(18)、なほ補足すべき所が見出されるから、以下卑見を申述べることにする。

前節で、白石が頼朝・尊氏・信長・秀吉等をあげて伯者論を試み、家康を以てそれらとは類を異にするもの——王者に擬したかの如く見える——として居ることにふれたが、家康がそれ以前の武家の棟梁のいづれにもまさる存在であることを具体的に述べた條としては、次の六ヶ條が挙げられるであらう。

(一) 財政上に於ける深慮(足利義政論の条)

「按ルニ、天下ヤ、定リヌルニ及デハ驕侈必生ズルコトニヤ。記ノシルス所ヲ見ルニ、室町家ノ政乱レシコト既ニ義満ノ代ニ萌シテ義教ノ代ニ長ジ、義政ノ時ニ至リテ極ルナリ(中略)天下ノ乱ト云フ物ハ、其ヨル所端多シイヘ共、其根本ハ天下ノ財盡テ民窮リ大名貪シクナレルヨリ事起ルナリ。我神祖、府庫ノ金銀ヲ御覽ジテ、此金銀半ニナラム時ニ天下ハヤ、乱ルベシト仰ラレシ、誠ニ深キ神慮アリト覺ルナリ。」全集第三
五六六頁

(二) 継嗣についての遠慮(同右)

「サレバ世ノ至テ重キコト人ノヨツギノ事程大切ナルハナシ。北條ガ鎌倉殿ノ嗣ヲ絶シコト、其後天子ノ皇統ヲミダリテ王室ヲ弱メ、摂家ノ支流ヲワカチテ其勢ヲソギシモ、皆是ヨツギノ事ニアラザルハナシ。(中略)近クハ我神祖、天下ノ法式ヲ定メ給ヒシニモ、此事ヲ返ス々々仰ラレシ、是全ク人臣ノ家ノ事ノミニハアラズ、人君ノ御事ニカ、レルナリ」全集第三
五五八頁

(三) 爪牙の利を畏れ、大名勢力の増大を招く政策はとらなかつたこと(同右)

「凡ソハ又義満ノ時管領四職ヲ定メラレシニ、天下ノ大名ヲ引スグリテ其職ニ任ジ、殊ニハ譜代ノ家ヲ立ラレシ返ス返スモ大キト云ベシ(註略) 応仁ノ乱ノヨリテ起ル所ナリ(中略) 此イハレヲバ近代織田豊臣ノ如キモユメユメ知り給ハザリシニ、我神祖心得セサセ給シ御事、誠ニ千古ニ卓越シ給ヒヌ。萬代ノ後マデモシタガヒヨリ給フベキ御事ニヤ。」同右
五
六〇頁

(四) 建都についての卓見 (同右)

「抑建都ノ事ハ、其子細有由ヲ申伝ヘ侍リ。(中略)平安奠都よりはじめ、賴朝の鎌倉開府以後、秀吉の大坂築城までを述ぶ)然ルニ、我神祖東国ニウツラセ給シ初世ノ人ハ、鎌倉ヲコソ御座所トナサルベケレト思シニ、サハナクシテ此所ニ都城ヲ定メ給ヒ永世ノ業ヲ開カレシ神謀ノ程、是又前古ニ超絶シ給シ御事ナリ。」
同右、五一頁

(五) 信義のあること (信長治世の事の条)

「秀吉、其孤子ヲ欺キテ国ヲバ奪レシカド、其クミセシ人々皆信長ノ旧臣タレバ、サスガニ其子孫ヲ絶サン事モカナハズ、況ヤ我神祖、秀吉ニ代リ給ヒ旧好ヲ忘レ給ハザリシカバ、今ニ其子孫国郡ヲモ領セラル。」
同右、五七九頁

(六) 主従關係にあらはれた忠信の風 (同右)

「世ニハ信長・秀吉ヨク識レ人ノ鑑オハセシト申スカ。某ガ思フ所ハ然ラズ。秀吉識レ人ノ鑑大キニ信長ニ及バズ。信長ノ識リ給ヒシ所モ、皆是真才ニハアラザリキ。(中略)秀吉ノ挙用ラレシ人々ハ、浅野等ノ事ハ暫ラク置ヌ、五奉行ノ如キハ謂ユル斗肖ノ人、数フルニ足ラザル所也。只ヨク英雄ヲ駕馭スルノ才オハセシナドハ云ベシヤ。夫モ其世ニ聞ヘシ人々真正ノ英雄ニハ非ズ、君モ臣モ所謂乱世ノ姦雄ニテ有シ也。イカデ我神祖ノ将士ノ皆是、忠臣義士成ガ如クハ有ベキ。」
同右、五七九
一五八〇頁

以上家康の美点として白石の挙げた所は、果してそのままに承認さるべきであらうか。先づ(一)であるが、財政上の深慮といふのは一応は認めてもよいと思ふが。それならば徳川の財政が以後何等動揺を来さなかつたかといふことになれば、周知の通り、はやくも四代家綱の時には均衡が失はれて居り、元祿に一たび行詰り、この正徳の頃に於いては依然逼迫状態をつづけてゐたのであるから、家康が財政問題に特に留意したことは、さすがに大政治家たることを感ぜしめるにしても、現実には程度の差こそあれ、足利氏が八代將軍の時に甚しい財政難に陥つたことと同様の

姿を示したわけであつて、一方的に家康を賞讃するのは偏跛のそしりを免れないであらう。(二)の継嗣についての遠慮も確かにあつたといへやうが——尾張・水戸・紀州三家の設置はその現はれであらう——はやくも四代以後に於いては順調を欠き、五代六代の間に多少の紛争が見られたし、六代七代八代と継承される場合にも葛藤があつて、それに原因する感情上の波動が政治面にも作用を及ぼしてゐる事實は問題となるところで、白石が既述の、いはゆる閑院宮家創立の進言を行つたのも、この不祥の現象を除かんが為であつたことを想起する必要がある(別著祭祀考——將軍への進呈書——に於いても、この継嗣の不順を取り上げて「天下の憂これにありて、微臣の惑又ここにあり」と述べて居る、惑といふ文字が注意を引く)。皮肉なことには、この進講が終つて程遠からぬ時期に家宣が死去することとなり、臨終の際、継嗣について白石の意見が徴せられるに至つて居る。白石の継嗣の事の進言は、まさに讖をなしたといふべきであらう。(五)の信義については、信長に対しての場合には然ういひ得るとしても、秀吉に対する場合にはむしろ反対であることは、殊更に策を設けて二世秀頼を滅した態度に於いて明瞭であらう。秀吉が死に臨んで家康以下の五大老に後事を托し、家康等が枕頭に於いて二心なきの誓を立てたことはよく知られた事實である。後に石田三成等が家康を除かんとして兵を挙げたのも、家康の不信義を理由とするものであつたではないか。但し白石の考は、天下は一家の私すべきものではなく、徳と器量と実功ある者が政治上の大権を掌握すべきものといふ所にあつた訳であるから、当然天下は家康に帰すべきもので、従つて家康が豊臣家にとつて代つたことは、必ずしも信義といふ尺度ではかる必要がないといふことであつた様にも見える。(天下が家康に帰すべきであるとの論は、藩翰譜に詳しく(6))。

他の三點も一応は承認し得るとしても、再検討の余地があるであらう。即ち、(三)と(六)とは相互に関連のあるものであるが、信長や秀吉の場合は、その志す所むしろ天下の統一にあつて、徳川の如く自家保存を第一としな

つたと思はれるから、深謀がなかつたとか、人を見る明がなかつたとか、或はまた乱世の姦雄であつたとかいふ批評を下すことは、必ずしも適當ではないであらう。これを信長の場合について見れば、短時日の間に旧勢力を打倒し、群雄割拠の形勢を転じて統一を実現せんが為には、外交上に秘策をめぐらし諸大名を巧みに牽制利用する必要があると同時に、部下の人材をして十二分にその能力を発揮せしめることが必要であつたのであるから——中国征伐に秀吉を起用した如きがそれであらう——、家康の如く譜代の臣、子飼の家来を用ひるといふやうな堅実な手段に出で得なかつたものと考へられ、また秀吉の場合も、日本の統一から進んでは大陸に進出せんとの大望を抱いてゐた為に、信長とは異つて諸大名に対し苛酷な態度や処置をとらず、白石も認めた程の寛大さを示したのであり、家康に対しては好敵手として非常な警戒を拂つた様であるが——関東への国替はその現はれであらう——、臨終の際にはこれに遺憾を托するといふ風な、信を相手の腹中におく態度に出でた訳である。自家保存といふ點は、信長の場合には不明であり、秀吉に於いては最晩年にそれについての顧慮がうかがはれるに過ぎないので、これを家康の用心の深さに比べれば、到底同日の談ではないのである。足利氏の場合は暫らく措き、信長・秀吉の事業は家康のその前提及び基礎をなすものであり、白石も信長については、「スベテ應仁ヨリ此カタノ乱ニ此人ノアラギリシ天下ノ衆ヲ馭リテ、我神祖ノ掌握ニ歸モシムルニ非ズバ、イカデ今日ノ泰平ヲバ致サルベキ」といつて居ることであるが、然りとすれば、家康の時と歴史的條件の異なつた織豊時代の政治をとらへ來つて、それらの上に立脚する家康の政治とを比較することには根本的に無理があらう（これは白石の麥の史観と矛盾するものであらう）。かかる平面的な比較論は、白石が潤飾ありとして斥けた梅松論が頼朝と尊氏との比較を試み、後者の優越を説いた態度と逕庭がないといへるであらう。或る個人並びにその事業の考察は、これをその生きた時代環境に即して行なふのが至当であらうから、右の如き白石の比較の仕方は、方法的に誤謬を犯してゐるとしなくてはならないであらう。思ふに、信長・秀吉・家康の三人が時

を同じうし踵を接して現はれた以上、織田家が子孫相うけて覇權握ることは先づ不可能であつたらうし、豊臣家の場合も同様であつたと見られるので、若しも白石のいふ如く、秀吉よりも家康の方がすぐれて居つたとするならば、信長の歿後、何故秀吉よりも先に家康が天下をとらなかつたか、といふ事が疑問とせられなくてはならないと思ふ（信長の頓死直後における秀吉の目覚しい活動と、家康の周章狼狽の姿とを比較すれば、いづれが天下をとるべき人物であつたかはおのづからにして明かであらう）。

更に思ふに、信長をしてその天才を發揮せしめたのは、先輩に當る武田信玄や上杉謙信の存在と圧迫との賜物であつたと思はれるし、秀吉があれだけの活動をなし得たのも、信長の人物鑑識眼がたかく、秀吉を信賴して責任ある事業を担当せしめたからのことであらうし、また信長の鉄腕によつて中世末の乱離が整理され、天下統一の素地が作られたことも成功の大きな原因となつてゐやう。而してその後を承けた家康の場合も、秀吉の築いた地盤をほぼそのままに承けついでことを始めとして、制度及び政策に於いても秀吉のそれを殆んどそのままに踏襲して居る點から見て、家康の先行者としての秀吉の存在意義の極めて大きいこと、改めていふまでもない。然るに白石が、信長と家康との間には事業上の連続を説きながら、秀吉と家康との間には、信長との場合以上にはるかに連続が緊密であるにも拘らず、それをいはず、むしろ秀吉の事業の欠點を挙げ、その遺した弊風を数へ立てるに急である如きは、公平を欠く態度といふべきであらう。

なほ、白石の論述に於いて納得し難いことは、「天子を挟む」といふやり方を信長と秀吉との場合に認め、家康をこれと區別して「神武を以て天下を服す」と賞讃してゐる態度である。周知の通り、信長・秀吉共に文官として立ち信長は右大臣、秀吉は関白太政大臣にまで昇進したのであるに對し、家康は頼朝・尊氏の例にならひ、征夷大將軍たらんとして朝廷の許可を得たのであるから、外面上は行き方に相違があるが、朝廷を利用した點は同様で、両者が本質的に

異るとはいへないであらう。家康が武職としての征夷大將軍を望み——これは秀吉も望んだところであり、当時の武家社会では最高權威を象徵するものであつた以上、当然の態度である——、將軍宣下をうける為にわざわざ伏見まで出かけて行つたことは、何を意味するであらうか（この伏見城で宣下をうけたことは、白石も指摘して居る——將軍宣下。三拾一度儀。不同次第）。ただ白石もいつた通り、いはゆる南朝の亡びた後は、天下の人々皇家の存在を忘れ去つた為、いはば利用價值がなかつたから^{卷一 末尾}、家康の場合は露骨に朝廷推戴の態度を天下に示さなかつただけの事ではないか。白石は、家康が神武を以て天下を服したが故に、信長や秀吉等の伯者とは同類ではないかの如くにいふのであるが、これを実力本位といふ意味に解するならば、信長・秀吉の場合も事情は殆んど変らないのであるから、神武といふ概念を家康の事業の場合にのみ適用することは適切でないであらう。（白石は王号論に於いて、天王・国王の區別を創案して論弁これつとめたが、その場合の国王は結局覇王であつて、儒教にいはゆる、徳化を以てする王者でなかつたことは疑ひないところである。）ともかく、家康に対する場合には、白石の尺度はそれ以前の武家の棟梁とは別のものになつてゐる所のある點が、白石の立論を弱くするもので、いはゆる科学性をはなれたと評せられることにもなる訳であらう。武家に限定する場合、賴朝から秀吉までの代表的人物にむけた鋭い批判の鋒先は、当然家康その人に対してもむけらるべきであるのに、それが行はれなかつたことは、本書が徳川將軍への進講録であつたといふ大なる制約をうけたことを認めるにしても、やはり批判を免かれないところで、これによつて讀史餘論の史書としての價值は、著しく減殺されるものとしなくてはならないのである。

結 び

人間にしても作品にしても、それが非凡なものであればあるだけ、毀譽褒貶を免かれないことは世の常である。讀史餘論についても、その評価は区々であるが、これが近世にあらはれた史論の中、代表的なものの一つであることには異論がないやうである。本稿に於いては、讀史餘論に關する問題點の二三を取上げたに過ぎないので、本書の特色を十分に彰はし得なかつたことを遺憾とするが、本書の成立期が白石の人間としての成熟期であると同時に、將軍の知遇を得てその天才を思ふ存分發揮出来た時期にも當つてゐたことから、立論内容の正確な解明は容易な業ではなく、白石の数々の政治的業績及び数多くの著作との関連に於いて精考をとげた後はじめて可能となることを、改めて感じ思ふのである。

第三節で問題とした白石の制度上の改革案については、特に經邦（世）典例との關係を考究する必要があることを感ずる。また紙数の關係で述べ得なかつたのであるが、第二節で取上げた九變五變の二元觀については、先輩に於いては武家事紀の著者山鹿素行を併せ考へる必要があるし（武家事紀がはじめに皇統要略をかかげ、ついで武統要略を敘する方式をとつてゐることに、本書の一つの先蹤を認めることも出来る（21））、そもそも變といふ考へ方については、先学もいはれたやうに愚管抄などから示唆を得てゐると想像して見ることも出来るであらう。また白石の公武關係觀を問題とする時には、先づ白石が通鑑綱目の愛読者で——白石が進講の書としてこれを選んだ理由の一つは該書については十分研究を積み澹泊宛手簡、全集第五、三二八頁自信をもつてゐたことにあるものと思はれる——、この点で神皇正統記の精神や主張と相通ふところがあること——讀史餘論に於いては正統記の引用が最も頻繁であることは周知のところであるが、同じく宋学の史觀を承けるものであるから、これは偶然のことではないわけである——、更に當時の學者、例へば王号論に於いて好敵手であつた雨森芳洲や、その他林信篤、室鳩巢、萩生徂徠等と比較することによつて、その考へ方の特徴が一層はつきりして来るであらう。就中徂徠との比較は、白石に対する過度の誤解を拂拭する

ためにも、是非試みなくてはならないと思ふ。私は別稿に於いても（註（14）参照）、本稿に於いても白石の家康観について忌憚なき批判を加へたが、然しながら白石を以て單に徳川への阿諛者と断するものではない。白石の家康観にはそれ相應の根拠があつたことを私も認める（22）。

第一節に述べたやうに、本書の成立を以て時務的関心に基くものとのみ考へるのは穩當を欠くものでそこには十分に學問的態度が現はれてゐることを見落してはならないと思ふのである。白石の學問は「天下有用の學」であつたと諸家の一致して說かれるところであり、私もそれが最大の特徴であると考へてゐる。而して讀史餘論は、さういふ特徴の最もよく現はれた作品の一つであることは争はれないところでもある。成程、古史通や東雅・同文通考の如き、或は采覧異言の如きと比較する時には、本書の學問的性格はうすいといはれるかも知れない。然しながら第一節で明かにした通り、本書に於いても白石の學問の良心は一面するどく現はれてゐるのであつて、そもそもそこには着実な基礎研究が存在してゐること、史実の正確なる把握のために史料の博搜につとめたといふ一事が、雄弁にそれを物語りそれを実証してゐるといへやう。

（昭和三十年十二月下泮稿）

【註】

- （1）東大附屬図書館所藏（旧南葵文庫藏本）、この存在は早く「新井白石文献總覽」（東京・日比谷図書館編）が明らかにして居る。巻頭に掲げた写真によつても判る通り、讀史論略の識語は沿革餘論のそれとほんの僅かながら字句に相違がある。
- （2）白石日記には宝永五年まで、各年末にその年の講筵の事を記し、以後記さないが、折たく柴の記及び手簡（安積澹泊宛―全集第五、三六四頁）等によつて、此の通鑑綱目讀篇進講のことが知られる。但し両者の記載には少しく齟齬がある（前者では家宣在世中に全部の進講を終つたといひ、後者では二三巻残つたと述べてゐる）。通鑑綱目の進講は、日記によれば、家宣の甲府侯時代、元禄八年からはじまつてゐるが、元禄十五年以後は殆んどが綱目で占められ、他は僅かに詩経（四回）、中庸・孝經大義（各一回）、等があるのみである。白石は綱目については、青年時代から研究をつづけてゐただけに、自信をもつてゐたやうである。従つて、讀史の史は、本朝の歴史の意味にとつても無論差支へないけれども、以上の如き事情から推して

、私はこの史を通鑑と見なす方がよいのではないかと考へる。なほ補説するならば、通鑑綱目進講と国史研究ひいては讀史餘論の稿の成立との關係に似るものとして、詩經進講と万葉集の研究との關係を挙げることが出来やう。即ち、後者は白石が家宣の詩經理解に便するため、我國の詩歌を引合に出す方法を考へそれに相応はしいものとして万葉集を選び、そのために白石自らが万葉集の研究を行ったものであるが、勿論その際、白石の国史研究や万葉研究に自主性がなかったといふのではないが、中年以後に於けるそれらの本格的研究が、家宣への綱目や詩經の進講を機縁としてゐることは疑ひないところである。後者の事情は、手簡に「昔詩書進講の時に、なにとぞ詩はこなたの歌のてにをはのやうにと心づき候て、それより万葉集の学にこそさしたる事に候」（全集第五一五四七頁）と云つて居ることによつて明らかである。

(3) その他、著名なものでは後年手入を行った作品としては、西洋紀聞があり、折たく柴の記がある。これについては、拙稿「西洋紀聞の成立の一考察」（新井白石序論、所収）を参照願ひたい。

(4) 著述の計画を予告したものとしては、北倭志（蝦夷志）・琉球考（南倭志或は南島志）があり（小瀬復庵宛、全集第五一・二一九頁）、同一書のことを再度述べたものとして、史疑（佐久間洞巖宛、第五一五二八・五四九頁）、同一書が二人の人物に語られてゐる例は、南北倭志（右の北倭志、南島志に同じ）（復庵ともう一人の安積澹泊、後者は第五一三・一七頁に見ゆ）貸出書写を認めた例としては古史通や西洋紀聞がある（前者は第五一・二〇六頁、後者は同上・一七二・二一七頁）。

(5) 定稿本がどういふ姿をとつたかは不明であるが、或は現在新井家に伝はる別本折たく柴の記などと似たものであつたのではないかと私は想像する。別本柴の記は白石の朱筆の加はつたもので（謄写者是不詳）誤字の訂正に止つてゐる。未だ十分の検討をへてゐないので確言を憚るが、終りの部分は或は白石の自筆にかゝるものではないかと考へられる。但し、この讀史餘論の場合は、例に「成二書」と見えることであるから、誤字の訂正以上に手の加へられたものと考へて見ることも出来なくはない。

(6) 中村孝也博士「史学者として新井白石」（史学会編、本邦史学史論叢下、所収）及び「讀史餘論の性格」（白石と徂徠と春台、所収）

(7) 池田雪雄氏著「新井白石」——二四四頁。

(8) 諸見解とは、右に挙げた中村博士の論文の他、清原貞雄氏著「日本史学史」、勝田勝年氏著「新井白石の歴史学」、大久保利謙氏著「日本近代史学史」、伊豆公夫氏著「日本史学史」、堀勇雄氏「新井白石と讀史餘論」（古典研究第一号所載）等に表明せられてゐるものである。

(9) 山路愛山氏は「家康は挟む所なりしが故に王者なりとする者也」として、白石を以て家康を王者扱ひしたと断定するが（「新井白石」一八六頁）、この伯者論の箇所「伯者ノ民ノ驩虞、王者ノ民皞々」といふ語を引いて家康のやり方が王者のものであることを述べてゐるあたり（全集第三一五八〇頁）、さう思はしめるものと多分にもつてゐる。また藩翰譜に於ける家康論と併せ考へる時（第五上永井、及び福嶋の條―註（19）参照）、これは一層明瞭となる。

(10) 武家官位装束考―全集第六、四七一―四七三頁、及び折たく柴の記―全集第三一五六―一五七頁等参照。

(11) 正徳元年十一日付のもの―従五位下、現在新井清氏所蔵。因みに此の位記のことは、日記―正徳元年十一月廿三日の條に見え、大和守（久世）の宅に赴いて位記口宣を受取つたと記して居る。

(12) 栗田元次教授著「新井白石の文治政治」本篇第五、及び同教授「新井白石の政治思想」（歴史と地理、十五の五）。

(13) 池田雪雄氏前掲著書、一七三―一四頁。

(14) 拙稿「国書復号紀事批判」―前掲拙著七九・八〇頁。

(15) 白石のこの条の発言を厳しく非難したのは頼山陽であるが（日本外史）、これについては田口卯吉博士の弁護のあること周知の通りである（「日本外史ト讀史餘論」―鼎軒田口卯吉全集第一卷、所収）。またこの一条について、栗田教授は「將軍が関白を兼ねる例を足利氏が開いて置いたら、かゝる苦痛もなかった（註―王号論での苦杯をなめたこと）との伏意かも知れない」と云つて居られる（前掲著書、四九五頁）。

(16) 伊東多三郎氏「殊号問題と將軍の權威」（日本歴史、第六七号）。

(17) 池田氏前掲著書、二三七―二四一頁。

(18) 勝田勝年氏著「新井白石の歴史学」―讀史餘論の章。

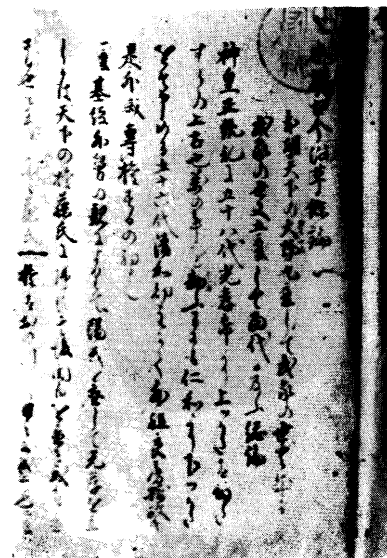
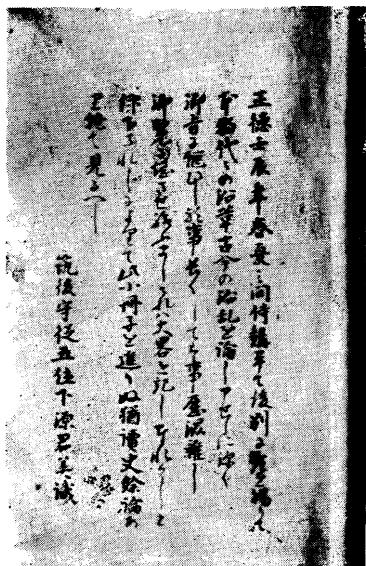
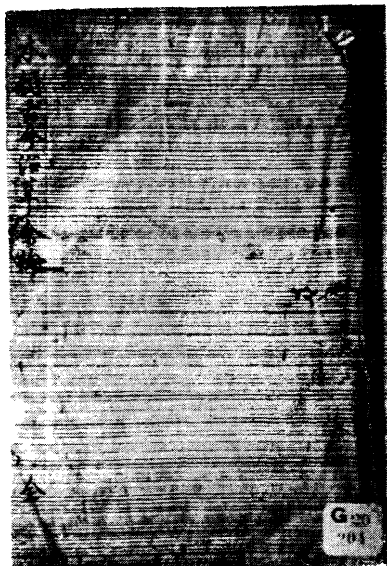
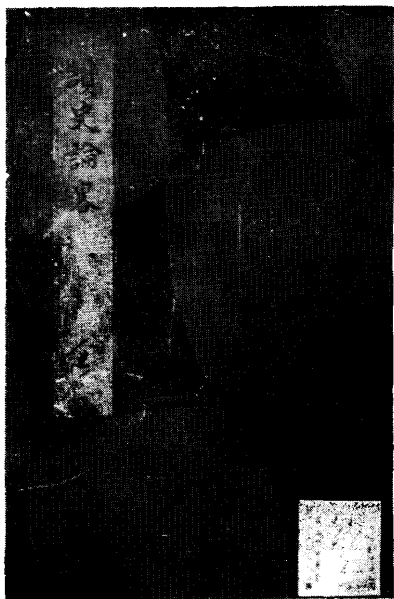
(19) 藩翰譜、第十二上福嶋の條―「家康を周の武王に比して居る（全集第一、五四三頁）」。

(20) 国書復号紀事に「降及三叔世、霸王代興、号令天下」云々（全集第四、七〇二頁）と見える。なほ、三浦周行博士「新井白石と復号問題」（日本史の研究第二輯、一〇六四頁）参照。

(21) 素行と白石との間には、特別なつながりはないが、史論に於いては似たところのあることが感ぜられる。本文に於いて述べた通り、事紀と餘論とが構想に於いて類似点をもつのみならず―両者が武家政治出現の必然性をといてゐる居る点を含めて―夫々の中に於ける主張でも、例へば守護地頭設置論（頼朝弁護）の如き、共通性を認めしめる。いはゆる公武の關係については、素行が「天下の治に時勢あり。王に王の治あり、武に武の治あり、古に古の治あり、今も亦然り。古今王武其の本を一にす。而して其の時勢異なるなり。時勢同じからざれば、又混一すべからざるなり。」云々（謫居隨筆、素行全集―岩波書

店刊―第十二、五〇八頁）と云って居ることは、第二節で辯証した白石の公武政治關係觀と、基本的考へ方に於いて相通するものあるを思はしめる。

（22）白石と徂徠とが、共に徳川幕府の強化につとめたことは、一般に認められたところであるが、白石が百年にして礼楽興る、として今こそ文治政治の実現せらるべき秋であるとした態度と、徂徠が礼楽制作（聖人の出現、革命による）につき五百年週期説を立てながら、不当にもそれを享保年中に適用した態度（小野寿人氏「徂徠学辨析」―史学雑誌、十二の八、参看）とを同一視することは出来ない。その他、徂徠には少からず徳川に対する阿諛迎合が認められる。両者の幕府強化案については、吉田東伍博士著「徳川政教考」に簡単ながら対比的説明がある（一七九―一八一頁）。なほ、白石の家康觀については「白石改貨論の思想的背景」（前掲拙著八三―八五頁）を参照願ひたい。



(上) 讀史論略，表紙

(上) 本朝古今沿革餘論，表紙

(下) 同 識語

(下) 同 第一丁表

(宮崎氏論文参照)

弘前大学 人文社会学会役員

会長	富野壮士
副会長	明比達朗
理事	霞信三郎
兼幹事	井浦芳雄
	今沢正雄
	川久保悌郎
	中泉哲俊
	福田勲
	亀尾利夫
編輯委員	霞信三郎
	井浦芳雄
	今沢正雄
	小島尚郎
	川久保悌郎
	小林時三郎
	中泉哲俊
	福田勲
	石崎宜雄

執筆者紹介

宮崎道生	弘大文理学部助教授
相沢文蔵	弘大文理学部助教授
秋月観暎	弘大文理学部講師
島邦男	弘大文理学部教授

「讀史余論考」正誤表

頁	行	正	誤
二	一〇	皆即疏記、累積日久	皆即疏記積、累日久
二	一四	成二書	或二書
四	一七	精力を傾注してゐた為に	精力を傾述してゐた為に
一	一二	疑問を抱くもの	疑問を抱くもの
一九	九	(4)であらう。この……	(4)であらう。この……
二二	一〇	サレバ世ノ至テ重キコト	サレバ世ノ至テ重キコト
二二	一六	返ス返スモ大キナル誤ト	返ス返スモ大キト
二五	一三	掌握ニ帰セシムル	掌握ニ帰モシムル
二六	一	覇権を握ることは	覇権を握ることは
二九	一五	(註2) 此の通鑑綱目続篇	此の通鑑綱目読篇

編輯後記

從來本誌は人文社会科学各分野の諸研究を総花式に掲載し、謂わば學術綜合誌の體があつた事は御承知の通りである。少くともこれまでではそれなりの意義もあり、一面己むを得ぬ事情も存した訳であるが、今日では必ずしも諸般の要望に應え得るものとは云えなくなつた。実はこれより先き史学研究室では本誌とは別に仮令ささやかなりとも史學關係の專誌を持ちたいとの議も出ていたほどであるから、本年度より編輯方針がvari特輯号方式が採られるに至つたことはまことに喜ばしく、ここに待望の史學篇第一号を世に問う次第である。収めるところの論考三篇、解説附き地図一葉は、量質共に特輯号を飾るに相応しい内容のものと思つずる。ただ残念な事は斯界の大先輩、野

辺地分校の松本彦次郎先生が偶々御不快しさを覚える。なお本号の編輯については国史の虎尾先生の手を煩わすこと少くなかつたことを附記して謝意を表する。(川久保記)

昭和三十一年三月二十五日印刷
昭和三十一年三月三十日発行

編輯者 弘前大学人文社会学会
印刷所 小野印刷所

發行所 弘前大学人文社会学会
弘前市富田町五二

弘前市富田町
弘前大学文理学部内
振替盛岡五四二五番

(非売品)